

漢文『漁夫の利』定期テスト対策問題 | 書き下し・現代語訳・句法の頻出設問と解答 解答・解説

問1 まさにいでてさらす

〔解説〕「方（まさに）～す」は再読文字で「ちょうど今～しようとしている／～したところだ」の意。「曝す」は日光に身をさらす、ひなたぼっこをする意。蚌が貝殻を開いてひなたぼっこをしている場面です。

問2 其の肉を啄む

〔解説〕「啄む（ついばむ）」はくちばしでつついて食べること。しぎが、口を開けている蚌の肉をついばもうとした場面です。

問3 即ち死蚌有らん

〔解説〕「即（すなはち）」は仮定条件を受けて「それなら（その結果）」と続ける働き。「有らん」の「ん（む）」は推量・意志の助動詞で、ここは推量「～だろう」。前の「今日雨ふらず、明日雨ふらずんば」という仮定を受けて、「（そうなれば）死んだ蚌ができあがるだろう」と訳します。

問4 両者相ひ舎つるを肯んぜず

〔解説〕「相（あ）ひ」は「たがいに」。「舎（す）つ」は「捨てる・放す」。「肯（がへ）んぜず」は「進んで～する・承知する」で、「不肯」は「どうしても～しようとししない」。直訳は「両者は、たがいに（相手）を放そうとはしなかった」。

問5 得て之を并せ擒ふ

〔解説〕「得て」は「うまいぐあいに～できて」。「并（あは）せて」は「両方いっしょに」。「擒（とら）ふ」は「とりこにする・つかまえる」。「之」は争っていた蚌と鷗の両方を指します。

問6 臣強秦の漁父と為らんことを恐るるなり

〔解説〕「臣」は蘇代が自分を指す謙称（わたくし）。「強秦」は強国の秦。「～が漁父と為らん（ことを）」は「～が（あの）漁夫の役回りになるだろうこと」。「恐るるなり」の「なり」は断定。「私は、強国の秦がああ漁夫のような立場になってしまうのを恐れているのです」という意味です。

問7 否定

〔解説〕「不（ず）」は下の動詞を打ち消す、漢文で最も基本的な否定の助字。「不雨＝雨ふらず」「不出＝出でず」。なお「不雨」「不出」は、後ろの「ずんば」とあわせて「もし～しなければ」という仮定の形にもなっています（順接仮定条件）。

問8

(1) イ（～であれば、その結果として＝仮定の帰結）

(2) （訳例）今日も雨が降らず、明日も雨が降らなければ、（おまえは干あがって）死んだ蚌ができあがるだろう。

〔解説〕しぎが、くちばしを挟まれたまま蚌をおどしているせりふ。「雨が降らなければ干あがって死ぬぞ」と

仮定で脅しているので、「即」は時間的な「すぐに」ではなく仮定の帰結「それなら～だろう」と訳するのが正解です。

問9 ウ（どうしても～しようとしな／進んで～しない）

〔解説〕「肯（がへ）んず」は「快く承知して～する」。それを「不」で打ち消すので、「どうしても～しようとしな／しない」という意志的な拒否を表します。「できない（不能）」とは区別すること。

問10

(1) 蚌：読み＝ぼう／意味＝どぶがい（はまぐりの類。大きな二枚貝）

(2) 鶻：読み＝いつ／意味＝しぎ（水辺にすむ、くちばしの長い鳥）

〔解説〕貝の「蚌」と鳥の「鶻」、二つの生き物の争いであることを押さえましょう。教科書によっては「はまぐり」と説明することもあります。

問11

(1) 曝す：（日光に）さらす。ひなたぼっこをする。

(2) 擒ふ：つかまえる。とりこにする。

〔解説〕「曝」は日へん＋「暴」で、日にさらす意。「擒」は手で生けどりにする意です。

問12（訳例）（すると）蚌は貝殻を閉じ合わせて、しぎのくちばしを挟みこんだ。

〔解説〕「合」は貝を閉じ合わせる、「箝（はさ）む」はぴったり挟む意。肉をついばまれそうになった蚌が、逆にしぎのくちばしを挟み返した、立場が逆転する場面です。

問13（訳例）（通りかかった）漁師が、（争っていた）蚌としぎの両方を、いっしょにつかまえてしまった。

〔解説〕「之」が蚌と鶻の両方を指すことを訳に出すのがポイント。争いに夢中で動けない二匹を、第三者の漁師がまとめて捕らえた、というのがこの故事の核心です。

問14 蚌（どぶがい）と鶻（しぎ）

〔解説〕争っていた当事者である二匹を、横から来た漁師がそっくり手に入れます。これが「漁夫の利」という言葉の由来です。

問15（解答例）たがいに相手を放そうとせず争い続け、二匹とも動けなくなっていたから。（28字）

〔解説〕「不肯相舎（たがいに放そうとしない）」が直接の原因。どちらも一歩も引かず意地を張ったために、共倒れになった点をまとめます。

問16 燕（えん）（のため）

〔解説〕本文冒頭に「蘇代燕の為に恵王に謂ひて曰はく」とあります。蘇代は、趙にこれから攻められようとしている燕を救うために、趙の王を説得しに来ているのです。

問17 A・B＝燕・趙（順不同）／C＝秦

〔解説〕蚌と鶻の争い＝燕と趙の長びく争い、漁夫＝その間に労せず利益を得る強国の秦、というたとえになっています。本文の「臣強秦の漁父と為らんことを恐るるなり」がその対応を示す決め手です。

問18 イ

〔解説〕蘇代の主張は「燕と趙が争い続けられれば、両国とも疲弊し、結局は強い秦に利益を横取りされてしまう（だから争うのはやめよ）」というもの。アは逆に攻撃を勧めており不適。ウ・エは話の本筋（国どうしの争い）と無関係です。

問19（解答例）恵王は蘇代の説得に納得し、「もつともだ」と言って、燕を攻めるのをとりやめた、ということ。

〔解説〕「善」は「よろしい・もつともだ」と相手の意見を認める言葉。「乃ち止む」は、計画していた燕への攻撃を中止したことを表します。たとえ話が功を奏した結末です。

問20（解答例）両者が争っているすきに、第三者が労せずして利益を横取りすること。

〔解説〕「漁夫の利を得る」「漁夫の利をしめる」の形でよく使われます。当事者どうしの争いと、それを利用する第三者、という構図を押さえましょう。

問21 イ（漁人之利）

〔解説〕「漁人之利」は「漁夫の利」と同じ意味の言い方。アの「四面楚歌」は周囲が敵ばかりで孤立すること、ウの「呉越同舟」は仲の悪い者どうしが同じ場に居合わせること、エの「螢雪之功」は苦勞して学問にはげむこと。混同しやすいので意味で区別しましょう。

問22（解答例）友達どうしのささいな言い争いに夢中になっていると、その間に大事なチャンスを他の人にとられてしまうので、引くべきところでは引く冷静さを持ちたい。

〔解説〕「当事者が意地を張って争うと、第三者に利益をさらわれる」という教訓を、身近な場面に置きかえて書けていれば正解です。自分の言葉でまとめましょう。

問23

(1) 戦国策

(2) ア（戦国時代の遊説家＝説客の言論・策略を、国別に集めた書物）

〔解説〕『戦国策』は前漢の劉向（りゅうきょう）が整理・編集したとされ、戦国時代の各国の策士たちの弁論や駆け引きを国ごとにまとめた書物です。「漁夫の利」は、そのうち燕の巻（燕策）に収められています。イは『論語』、ウは『詩経』などの説明にあたります。